

ペテロの書簡 #27

救いへの脅威

(<https://ichthys.com> でもご覧いただけます)

ロバート・D・ルギンビル博士著



「信仰は私たちの永遠の命の鼓動である」

はじめに: ペテロ第一の手紙 1 章 6-9 節を読み終える前に、救いに関する三つの誤った教義を検証する必要があります。この三つはすべて、信者の信仰に破壊的な影響を与える可能性があります。それらは、次のような誤った教えです。

- 1) 組織/団体所属による保障
- 2) 既得地位的保障
- 3) 艱難回避の保障

これらの三つの誤った教えは、教会の歴史を通して有害であることが証明されており、今日も信仰を損ない続けています。さらに憂慮すべきことは、将来、大艱難に直面するであろう信徒に、これらの偽りの教えが潜在的な脅威を与えていることです。

偽りの教えの陰湿な性質: 偽りの教えは、エデンの園で食べることを禁じられていた善悪の知識の木についての主よりの命令を悪魔が歪めて騙した人類の最初の経験以来、ずっと存在しています。

へびは女に言った、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。」

それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」。(創世記 3章4-5節)

これは嘘でした。私たちの最初の両親は、霊的な死(神から遠のいてしまう)を経験し、その後、肉体的な死(不従順の結果の一つ)を経験したのです。創世記 3:4-5 で蛇を通して語られたサタンの言葉は、すべての信者が心に留めるべき、恐ろしい例です。園での誘惑は、その後に続くすべてのサタンの欺きの原型のようなものです。

良い嘘の本質とは、少なくとも真実の**核**を含み、信じるに足る**魅力**があり、聖なるもの、神聖なもののように**見える**ということです。

1) 真実の核： アダムとエバはすぐに地面に倒れて肉体の死を遂げたわけではありませんでした；目が「開かれ」、罪人として善と悪を認識するようになり、その結果、その「善」である神から自分達が疎外されたことを認識しました。

2) 誘惑： あらゆるものを手に入れている二人をどのように誘惑するのでしょうか？ 彼らは樂園に住んでいたのですから。サタンは非常に巧妙にその方法を見つけました。アダムとエバは神である主という権威ある方とよく交わりをしていました(創世記 3 章 8 節、2 章 19 節)。「神のようになりたいとは思わないか」と悪魔は問いかけます。被造物が創造主と同等になれると考えるのは、間違いなく最も傲慢な思い上がりですが、この言い回しは巧妙です。神は良い方です。神のようになることも良いことではないでしょうか？ もちろん、自分の努力で「神のようになる」ことは、「神と同等になる」「神のようになる」、そして最終的には「神に取って代わる」ための傲慢な妄想の第一歩に過ぎません。悪魔は、まさにこのプロセスを経たのです。悪魔は、ケルブの中で最も好かれていた存在であったのに、今もなお主に対して反抗し、主にとって代わろうとして夢中になっているのです。自分の意志で「神」になることの魅力は非常に強力であり、世界のすべてのカルトと偽宗教(特にキリスト教を装ったもの)の背後にあるのは、まさにこの動機(様々な形で表現されている)なのです。

3) 神聖さを装うこと： 悪魔は、蛇という媒介物を通して、その鋭く、かつ悪意のこもった言葉で、神、神の知識、個人の霊的向上について語るのです。悪魔は、あたかも自分が神に好意を寄せ、尊敬しているかのように語ります。彼は、直接神の悪口を言うようなことはせず、むしろイブの状況に対する見方に少し疑問を投げかけることをします。悪魔は、彼女がすべての事実を把握していないし、また正しく理解もしていないと示唆します。そして、ほら実のところ、これが真実なんだと言うのです。そしてもしこの望ましい実を食べるなら、あなたにとってずっといい結果になる。あなたは神があなたに善と悪をわきまえるより良い人間になってほしいと思わないのかい？ 真に効果的な嘘は、

決して真実に対して真っ向から反対しません。そうではなく、真実を取って代えようとするのです。そのために、できるだけ真実と同じように見せかけようします(それゆえ、キリスト教とは全く関係のないほとんどすべてのカルトが、少なくとも最初はキリストについて良いことを言うのです)。サタンはこの最初の大きな嘘を神聖に見える糖衣で包み、イブが自分のしていることは全く問題なく、進歩的でさえあると確信するほどでした。悪魔の攻撃の巧妙さと利きの良さを考えると、それも意外なものではありません。

a. 友好的な代理人：サタンは巧妙に、イブに直接アプローチせずに、代わりに、彼は蛇を使いました。蛇はイブにとって馴染み深く、友好的な仲間であったに違いないと推測されます。

b. 神との親しさ：主が使われたのと同じ言葉(ヘブル語の「～してはいけない」以外のほとんど同じ言葉！)を使って、エバに話しかけました。彼は「主」をよく知っているようですが、尊敬語である主ではなく、なれなれしく一般的な「神」という言葉で呼んでいます(1 ペテロ 3 章 6 節参照)。

c. 秘密の欲望を正当化すること：サタンの約束は二つの部分から成っていました。「善悪を知ること」と「神のようになること」です。それは抱き合わせ取引きでした。この非常に効果的な嘘は、代償(「善悪を知ること」)は利益(「神のようになること」)に見合うものだとしてエバを説得しました。それは言うまでもなく酷い取引でした。なぜなら、その真実は、自分が罪人になってしまったという神の認識を共有するようになって「神のように」なったというだけで、誘惑の種だった知識の代価は、神からの疎外であり、霊的、肉体的、そして最終的には永遠の死という形で神の怒りと裁きを受けるとい、恐ろしいものだったからです。エバと私たちのためにこの代価をその死によって支払って下さった方、私たちの主イエス・キリストに感謝します！

エバも、そしてアダムも、精神的に問題を抱えていたわけではありません。これは、彼らの特殊な状況に合わせられた巧みに仕組まれた手ごわい攻撃であり、私たちも現代のそれと同様な攻撃に対して、当然抵抗したほうが良いでしょう。神を知っていると思われる親しい友人(あるいは権威者、組織)が、あなたに霊的に有益なこと(あなたが本当に魅力を感じることを)を勧めているのに、どうして嘘をつくことがありえるだろうと思うことでしょうか。しかし、時にはそれが嘘であることもあります。私たち信者は、このような欺瞞に満ちた信仰への攻撃に対抗するための識別力を身につけなければならぬのです。

アダムとエバは、主ご自身という優れた情報源を持っていました。そして、私たちの情

報源もそれに劣らず素晴らしいものです：つまり神の御言葉です。私たちの最初の両親は、神の語られたことばに耳を傾けませんでした。あまりにも多くのクリスチャンが、書かれた御言葉に耳を傾けないので、もっとよく知っているはずであり、実際にはもっとよく知っているのに、信仰における知識に耳を傾けないために、欺きに陥っているのです。これは何も驚くことではありません。また多くのクリスチャンは、神が何を考えておられるのかを学ぶ機会（聖書を読んだり、教えを受けたりする機会）を逃してしまうことによって、自分を弱くしています。そのため、試練と誘惑が訪れたときに、間違った教えや偽りの教師によってより簡単に欺かれてしまうのです。アダムとエバがそうであったように、情報は私たちにも提供されています。神は必要な知恵を求める者に差し控えることはなさいません（ヤコブ 1 章 5 節）。神の真理を学ぶことに熱心に取り組むことによって、悪魔が私たちと真理の間、ひいては私たちと神の間にくさびを打ち込むような巧妙で誘惑に満ちた嘘を持ち込むことは難しくなるのです。

信仰を脅かす三つの偽りの教義： 私たちクリスチャンにとって、主であり師であるイエス・キリストへの生きた信仰を育み、築き、維持することほど重大な課題はありません。私たちの信仰を脅かす、広く普及し、よく知られている次の三つの偽りの教義について、信者が警戒し、情報を得ることが非常に重要であると私は信じています（もし、私たちがそれらを受け入れ、頼ることがあれば）。組織/団体所属による保障、既得地位的保障、艱難回避の保障は表面的には無害に見えることは、悪魔の最初の嘘に似ています - 私たちの信仰を直接攻撃するのではなく、むしろ私たちの信仰をプレッシャーのある時に脆弱にする陰湿で密かな攻撃なのです。

組織/団体所属による保障： 制度的安全保障とは、救いは教会のメンバーであることの結果であるとする教えです。もちろん、この教えには様々な種類があり、このような表現が使われていることはあまりありません。ローマ・カトリックの *non salus extra Ecclesiam*（「[ローマ・カトリック]教会の外に救いはない」）のような直接的な主張から、「入会」しなければ自分の永遠の未来を危険にさらすという慎重な示唆まで、団体所属による安全保障の表現は、組織に参加することが安全の前提であると、一般的に間違ったことが主張されています。この教義は、まず人々を組織に引き入れ、いったん入ったら、そこに引き留めておくためのものです。しかし、この恐怖に訴える教えの裏では、それを提唱しているグループの多くが、同様な付帯事項を肯定しています、「もしあなたが組織に入り、立派に会員であり続けたら、会員であるという事実だけで救われる」と。この教義には、聖書的な根拠が全くありません。

この間違った教義の他の表れには、儀式(バプテスマなど)、祝福(カリスマ的な「第二の祝福」など)、特別な知識など、正当か違法かにかかわらず、救いを与えるために特定のグループや個人を通してのみ与えられるものが含まれます。ある教会の指導者や教会やグループが、救いにとって非常に重要で必要なもの、他の場所では得られないものを持っていると確信すると、人々は、キリストとその真の教会への忠誠ではなく、この地上の人物や組織への忠誠が救いのために重要であると考えられるようになります。

団体/組織所属による保障の現象とその問題点については、私たちの主が直面した当時の状況ほどよく説明できるものはないでしょう。イエスの時代には、神への礼拝はモーセの律法を越えて「制度化」がなされ、真理の本質に対する実感や理解はほとんど失われかけていて、パリサイ人、サドカイ人、エッセネ人の三者体制は、神を探す方法あらゆる手段を提示していましたが、神を見出す真の方法を与えてはくれませんでした。ある時、主は宗教団体の指導者らに、彼らは自分たちが教えている聖書の中に永遠の命があると思い込んでいるが、実際には、聖書は彼自身(主)について書かれているのだ、と率直に言われました(ヨハネ 5 章 39 節、マタイ 23 章 13-28 節も参照)。それこそが、全体の確かな核心です。私たちはイエス・キリストを信じ、イエス・キリストに従うのです。神の使者、神に仕えるために設立された組織は、クリスチャンとして生きるという与えられた課題を達成するための補助的なものに過ぎません。問題は、そのような補助の役割を果たすべき人や組織自体が目的になってしまうことです。

信者の立場からすれば、その危険性は何よりもまず救いの問題です。なぜなら、人はキリストを越えてキリスト以外の人や、組織に第一の忠誠を誓いながら真にキリストを信じる者であることはできないからです。少なくとも、人格や組織への忠誠心は信仰の視界を曇らせ、そのような忠誠心があれば安全だという思い込みがもたらすもう一つの(それに次ぐ)危険は自己満足です。一旦、人格や組織が信仰の焦点になってしまうと、霊的に成長し、神を求め、神に近づこうとする必要性や意欲が必然的に薄れてしまいます。そして、そのような自己満足は、皮肉にも、以下に述べるように、霊的な弱さの危険を増大させるだけなのです。

教会の長い歴史の中で、「組織/団体的保障」は、私たちが今論じている三つの誤った教義の中で、最も有害なものでした。悪魔がエバを騙したように、この教義は説得力のある嘘です。

1) **真理の核がある：**キリストの教会の生きた一部となることの重要性は疑う余地がありませんが、すべての真の信者の普遍的な霊的地位を、地上の特定の人やグループ

と同一視するのは間違っています。クリスチャンとして、私たちは確かに一つの体の一部であり、私たち全員が特別な賜物を持ち、仲間の信仰を高めるための特定の務めを任されています(エペソ 4 章 11-16 節)。その「体」はキリストの体であり、私たちの主は誰がご自分に属しているかを知っておられます(テモテ第二 2 章 19 節; ヨハネ 10 章 14 節; コリント第一 8 章 3 節参照)。主への真の信仰の特許を持っている人はいません。私たちの救いの鍵を握っているのは、どんな組織でもありません。もし私たちが本当にイエス・キリストを信じているなら、私たちはイエス・キリストの教会の一員なのです。過去二千年のキリスト教の歴史の中で、多くの礼拝、奉仕、集団組織の形態が発展しても、この事実は決して変わりません。キリスト者の忠誠心は、伝統にでも、組織にでも、個人にでもなく、キリストに対してでなければならないのです。なぜなら、救いに至るのは、キリストへの不動の忠誠、キリストへの継続的な信仰であって、地上のいかなる人物や団体への忠誠でもないからです。

2) **強い魅力がある：** この間違った教義には、多くの人が魅力的だと感じるいくつかの面があります。第一に(そして最も明白なのは)、キリストを信じる真の信者にとって生涯続くプロセスである内的変化を、組織的信者は免れるというものです(ローマ 12 章 1-2 節、エペソ 4 章 23-24 節)。ニセ・キリスト教の団体でさえ、一般にそのメンバーには多少の表面的な変化を要求しますが、心から神に献身し、キリストに真剣に(聖書的に)弟子として仕え、日々自分の十字架を背負って神に本当に従うこと—そのような面倒な献身は、善良なメンバーであり続けるために通常必要ないというのです。組織のルールに従うだけで、「保障」は継続されるというものです。しかし、この勧誘の第二の部分は、もう少し微妙なものです。神が私たちに求めておられることは、心の変化と御子を通して真剣に神を求めることです。しかし多くの人は自分のやり方でやりたがるのです、つまり、自分の努力で神を求め、自分の益になることを望むのです。しかし神の方策はめぐみです。生まれながらにして罪深い存在である私たちにとって良いことは、神抜きでは、何であれ私たちのすることは、完全であり、源であり、聖なる神の御性格にとっては、そぐわないものです。

だからこそ、イエス・キリストは私たちのために死ななければならなかったのです。私たちが自分の力ではなく、キリストの働きによって、真に正しい神に近づくことができるようになるためです。しかし、(私たちの必要のための仕立てられた犠牲の死という生贄の血ではなく)自分の努力の結晶を神に捧げることを好んだカイン以来、神が自分にしてくださったことよりも、自分が神のためにできることに感動する人たちがいます(シリア人ナアマンの例:列王記下 5 章)。この種の「尊大さ」は、「団体組織の保障」と呼ばれる特殊な制度に大きな役割を果たしています。あなたは所属しているから安全だというだけでなく、あなたが神のために何をしたかを見てくれ！というものです。このようなアプローチはすべて、危険な愚行です。

3) 神聖さの外観を装う

a) 友好的な代理人： マルティン・ルターの時代の既成教会は、あらゆる伝統的な装いをまといながら、唯一無二の、欠点なき権威のような雰囲気を漂わせていました。他にどこに頼むところがあるでしょうか。私たちは、ルターと真に主を求める他の人々が、快適で、安全で、伝統的なものに頼るのではなく、神と神の言葉に目を向けたことを神に感謝していますが、私たちは、そのような昔からの引き戻す力を過小評価してはいけません。ヘブル人への手紙を受け取って読んだ者たちは、エルサレムの神殿礼拝を抗しがたい誘惑と感じ、これらの象徴がキリストの死によって取って代わられたことを十分に教えられていたにもかかわらず、懐かしさと迫害への恐怖から、キリストの真の犠牲の効力を否定するに等しい儀式的制度に引き戻されてしまったのです（ヘブル 6 章 4-6 節）。

b) 神への親近感： 大きな組織化された宗教は、たとえ偽キリスト教であっても、必ず神をよく語り、キリストのために特別な場所を割きます。しかし、私たちは、父なる神への道はただ一つであり、それは**ただ御子を通してのみ**であることを知っています。他の神々、聖人、天使、生死を問わず人間の男女を組み合わせて崇拝することは、神には受け入れられません（ヨハネ 14 章 6 節）。

c) 秘密の欲望を正当化すること： 自分よりも大きなものに属したい、自分よりも大きなものによって不安や疑念を和らげてもらいたいと思うのは、あまりにも人間的な欲求です。これは正当な欲求であり、キリストの仲介による愛に満ちた父との関係によって適切に満たされるものです。しかし、この欲求を人間や人間の制度に求めるのは愚かなことであり、自分の意志と判断をそれに委ねることは霊的な災いを招くことになります。なぜなら、最終的には、たとえその責任を「大きな」ものや誰かに放棄したとしても、その選択の責任は私たちにあるのですから。その危険性は十分にあります。なぜなら、人間にとって大きな集団に属することは、特別に何か心地よいものだからです。「たくさんの方がいるから正しいに違いない」、「多数派の安全」というものです。もし神が私たちに真理のために行くべき場所、聖典や御言葉の教えを与えて下さらなかったら、この考え方はより説得力があったかもしれません。しかし、私たちには自由に検討できる聖書があり、主が導かれるところなら、どんなに大勢が反対方向に向かっても、従わなければなりません（黙示録 14 章 4 節）。

既得地位的保障： 既得地位的保障とは、人が最初にキリストに信仰を置いたなら、救いは無条件かつ不可逆的であるという教えです。少なくとも間接的には、私たちは

この教義の誤りを第一ペテロ・シリーズで述べてきました(特に#12を参照)。一度救われれば、ずっと救われる」という考え方は非常に心強いのですが、このような教えは聖書には全くありません。実際、主の説教は忠実に従うことの必要性を説き、この間違った教義とは正反対の視点を明確に示している聖書の箇所を数多く見てきました(以下、再確認します)。「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」(マタイ10章22節)。種をまく人のたとえのように、聖書は御言葉を(明らかに純粹に)信じていても、個人的な問題や迫害の時に信仰から離れる人々がいることを認めています(マタイ13章20-21節)、さらに他の人々は、より深く根付いたものの、世の惑わしのためにキリストに対して実をもたらすことはできません(マタイ13章22節)。間違えてはいけないのは、神は私たちが忠実であることを望み、期待しておられるということです。実際、神のみこころは、すべての人が救いに至ることです(テモテ第一2章4節; ペテロ第二3章9節)。神を求めない者、求めても後に背を向ける者、手ぶらで会いに行く者、これらはすべて自分の自由意志でそうしているのです。

「永遠の安全保障」とも呼ばれるこの教義は、歴史的な観点から見ると理解しやすいものです。中世の教会が、信仰者に努力して天国に行かせるという不可能かつ非聖書的な課題を課していたことに反発し、改革派の神学者が神の選択と選民の無条件性を強調することを望んだのは不思議なことではありません。また、現代の福音主義者が選民-神学を明確にして、より理解しやすい「一度救われた者は常に救われる」という教義にまとめあげようとしたのも不思議なことではありません。しかし、真実は、神はご自分を求める人を選び(#3と#8参照)、忠実に従う人を解放されるのです。罪のない完全な人(そんな人は存在しません #15を参照)ではなく、生涯のすべての浮き沈みを通して、この世よりも神と御子を選び続ける一貫した忠実な人なのです。既得地位的保障の誤った教義は、クリスチャンに多くの慰めを与え、救いのために働くという誤った原動力を取り除いてくれるのに大いに役立ちます。神との関係を積極的に追求し、救い主に従い、自分に与えられた賜物や使命を忠実に実行しようという意欲を自然に持っている信者にとって、既得地位的保障の教義は、少なくとも良い時代には、それほど脅威にはならないのです。一度キリストに献身すれば、何があっても救われると信じることの最大の問題点は、自己満足にあります。「一度救われたら、ずっと救われている」というのは、自分の信仰に対する自己満足と罪(悔い改めずにひどく甘やかすと、結局は信仰に対する最大の脅威となる)に対する自己満足をもたらします。

この問題は、教会の初期の歴史に前例がないわけではありません。ヘブル書の著者は、自己満足に浸っている聴衆に対して、「押し流される」危険性を指摘しています(ヘブル2章1節)。神に反抗し、罪によって心を硬くすることは不信仰(ギリシャ語の *apistia*、文字通りには信仰の欠如)につながると彼は言っているのです。

兄弟たちよ。気をつけなさい。あなたがたの中には、あるいは、不信仰[信仰の欠如]な悪い心をいだいて、生ける神から離れ去る[あるいは「反抗的な」]者があるかも知れない。あなたがたの中に、罪の惑わしに陥って、心をかたくなにする者がないように、「きょう」といううちに(すなわちこの世にとどまっている限り)、日々、互に励まし合いなさい。もし[主における私たちの信仰の]最初の確信を、最後までしっかりと持ち続けるならば、わたしたちはキリストにあずかる者となるのである。(ヘブル 3章12-14節)

悲しいことに、これこそ出エジプトの世代が、主の御手による劇的な救いの奇跡を経験したにもかかわらず、神から離れることになった信仰の欠如のパターンでした(ヘブル 3章 15-19 節; 12 章 25 節)。このように、「永遠の安全保障」という誤った教えは、いずれにしても熱心にキリストに従っているクリスチャンにとっては、平時にはさほど問題にはなりません。本当の問題は、このような教義を真に受け入れると、クリスチャンとしての適用が超人的でない私たちの中に危険な自己満足を生じさせることです。「一度救われたら、常に救われる」というのは、私たちの「早期警戒システム」の大部分を取り除き、個人の罪が私たちの霊性にもたらす脅威に対してより寛容になる傾向があり、日々精力的に主に仕え続ける動機をいくらか失わせてしまうことがあるのです。強い圧力と苦難の時代という最悪の場合、つまり信仰が限界に達するような時代には、何があっても大丈夫だと信じることは二重に危険なことなのです。これは、信仰を捨てたり、妥協したりしない限りにおいてのみ、真実です。

現代のクリスチャンにとって、「既得地位による保証」は、これから説明する三つの誤った教義の中で最も有害なものです。悪魔がエバを欺いたように、この教義もまた、説得力のある嘘であることが証明されています。

1) 真理の核がある：神は私たちを愛し、イエス・キリストは私たちのために死なれました。私たちは今、神の家族の一員です。私たちは贖われ、聖別され、選ばれた者であり、永遠の命(そしてその永遠の命の誓約としての聖霊)を持っているのです。これらの教義とその他の教義は、御子イエス・キリストへの信仰を通しての父なる神との関係の永遠の意義と究極的に破られない保証を語っています。しかし、私たちはまだその永遠の命を体験していません。私たちは新しい、永遠の体に置かれていません。この世から取り去られ、天に召され、評価され、報いを受け、キリストと永遠に共にあるようになったわけではありません。私たちはまだここにいるのです。悪魔の世界にいるのです。そして、私たちがここにいる限り、戦いは続くのです。この世にいる限り、私たちは忠実でなければならず、何よりも信仰を維持しなければならないのです。私たち

に約束されている永遠の祝福はすべて、私たちの主イエス・キリストを信じるこの信仰によって、またこの信仰に基づいて、充当されるものなのです。しかし、もし私たちがその信仰を放棄するなら、それに伴うすべての利益を放棄することになります(この重要な条件については以下を参照)。

2) **強い魅力がある：** この間違った教えの最も強い魅力は、クリスチャンに自分の行動には何の影響もない、少なくとも最も重大な影響である救いの喪失はないという間違った保障を与えることです。個人的な罪をかかえていませんか？ 主との関係を深めるなんて煩わしいと思っていますか？ あなたに与えられた賜物や奉仕の場を通して神に仕えることには興味はわいてきませんか？ これらのことは、あなたの救いを危険にさらすことなどないし、あなたがこの世でどんなに怠け、不遜になり、邪悪になったとしても、あなたが一度はキリストを信仰したという事実によって、たとえあなたが御子を拒絶するまでに至ったとしても、神があなたに神と御子との永遠の命を保証するのに十分ですというものです。しかし、後で見るように、神との関係を無視し、罪に身を委ねると、時が経つにつれて、私たちの心は想像もできないほど硬くなり、私たちを贖って下さったと信じていた主を拒絶することさえできるようになります。

しかし、民の間に、にせ預言者が起ったことがあるが、それと同じく、あなたがたの間にも、にせ教師が現れるであろう。彼らは、滅びに至らせる異端をひそかに持ち込み、自分たちをあがなって下さった主を否定して、すみやかな滅亡を自分の身に招いている。(ペテロ第二 2章1節)

3) 神聖さの外観を装う：

a) **友好的な代理人：** 最も尊敬されている福音派の説教者や教師の何人かは、この見解を持っています。

b) **神との親密さ：** 既得地位的保障の教えは、正しく神の愛を強調しますが、神の正義と義を無視します。

c) **秘密の欲望を正当化すること：** 私たちは皆、愛に満ちた神は、私たちが何をしたとしても、決して自分を見捨てたりはしないと信じたいと思うものです。そして実際、神は私たちのために御子が十字架上でなして下さったことに基づいて、私たちの罪を赦してください。しかし、もし私たちが御子を拒絶し、その働きを否定するなら、神もそれに応じて答えられます(テモテ第二 2 章 11-13 節)。

艱難期回避の保障： 艱難期回避の保障とは、今の時代の信者は艱難時代を経験する必要はなく、その暗い時代が始まる直前に生きてよみがえり、集められるという教えです。艱難期前携挙(略して「携挙」： 艱難期後携挙については後述)とも呼ばれるこの教義は、比較的新しいもので、19 世紀、聖書の予言と、予言された将来の出来事に関する聖書の教えへの関心が高まる中で生まれたものである。この教えの中心はテサロニケ人への手紙第一 4 章 13-18 節ですが、これは、パウロがテサロニケの教会に伝わったある偽りの情報に対する不安を払拭しようとしていたものです。復活はキリストの再臨の時に生きている者だけに適用され、死んでしまった者達は、永遠の体と命を受けそこなったのだというような噂が広まっていたようです。パウロは、そのようなことはなく、キリストの再臨の時には、キリストにある死者が最初によみがえるのだと断言します。

わたしたちは主の言葉によって言うが、生きながらえて主の来臨 (*parousia* パルーシア)の時まで残るわたしたちが、眠った人々より先になることは、決してないであろう。すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラツパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ (*harpazo* ハルパゾー)、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。(テサロニケ第一 4 章 15-17 節)

この教えが論議を呼ぶので、千年王国以前の艱難期前携挙の教義について、簡単に反論しておく必要があります。

1. 「*parousia* (パルーシア)」という言葉について:

上記の聖句において「来臨」と訳されている言葉は、ギリシャ語「パルーシア」で、この言葉は新約聖書の神学的文脈の中で、キリストの再臨、つまり、主が天の王国を建てられるために地上に戻って来られる再臨にのみ使われています(マタイ 24 章 3 節; 24 章 27 節; 24 章 37-39 節; コリント第一 15 章 23 節; ヤコブ 5 章 7 節; ペテロ第二 1 章 16 節, 3 章 4 節, 12 節; ヨハネ第一 2 章 28 節 参照)。このテサロニケ人への手紙の文脈の中でも、この法則が当てはまり(テサ第一 2 章 19 節; 5 章 23 節参照)、この箇所でも主が信者を集められるのは再臨の時に起こるのであって、(艱難期前携挙説の主張者の言っているように)艱難期の前に起こるのではないという結論に導かれます。

さらに、パウロが上記の箇所でパルーシアという言葉を使ったのは、テサロニケの教会が再臨を意味すると解釈したことは、使徒が同じ信徒に宛てた第二の手紙 2 章 1-3 節と 2 章 8 節に明白に示されています。8 節で、パウロは、大背教と獣の出現(間違いなく艱難時代の出来事)の後に主の来臨がなければならないと明言しているので、これらの節にある「来臨(パルーシア)」という言葉は、再臨を指しているに違いないのです。なぜなら、その時、キリストの再臨によって、反キリストは「主の来臨(パルーシア)の輝きによって滅ぼ」されるからです(テサロニケ第二 2 章 8 節)。

上記の箇所の文脈がこの見解を直接裏付けています。テサロニケの人々が復活の時期について混乱している中で、パウロがパルーシアを主の「最後の復活」ではなく、艱難時代の前の短いランデブー(特に聖書では前例のない出来事)に使っていたなら、ここで明確にすることが不可欠であったでしょう。この箇所でパウロが語っていた内容には、他の説明もなく、読者は当然のことながら、再臨を意味していると解釈したことでしょう。叫び声(ヨハネ 5 章 28 節; ヨハネ 11 章 43 節も参照のこと)、大天使とそのラッパの鳴り響く音(マタイ 24 章 31 節; コリント第一 15 章 52 節; 黙示録 11 章 15 節、黙示録 19 章 1-6 節も参照のこと)は、王の再臨の時に起こると預言されている、死者と生者の両方の忠実な人々の集められる際に伴うしるしです(マタイ 24 章 31 節; マルコ 13 章 27 節; レビ記 23 章 23-25 節と民数記 29 章 1-6 節の再臨の時に予測されるイスラエルの再集会を祝うラッパの祭りを参照のこと)。「雲」(帰って来る復活した信者の軍隊: 黙示録 19 章 14 節)の言及さえも、明らかに再臨を暗示しています(ダニエル 7 章 13-14 節; マタイ 24 章 30 節; 26 章 64 節; マルコ 13 章 26 節; 14 章 62 節; ルカ 21 章 27 節; 黙示録 1 章 7 節)。

2. 携挙された信者の証拠がない: 現代のすべての信者にとって、この携挙の教義が重要であるにもかかわらず、<艱難を通過しないで>復活した信者が再臨まで天で時を待つという記述は、預言書には見当たりません。黙示録 6 章 9-11 節には、艱難時代に殉教し、天国で再臨のときを待っている復活していない信者についてはっきりと書かれています(黙示録 7 章 9-16 節, 12 章 11 節, 15 章 2-4 節 にも書かれています)。

3. 復活の三段階: パウロは第一コリント 15 章 20-28 節で、復活の段階または「エシュロン」について説明していますが、これは義人の復活が歴史的にどのように展開するかを明確に描いています(レッスン#20 を参照)。それは、三つの段階を経て起こるのです。この三つの復活の「段階」は、次のように起こります。

a. 「初穂であるキリスト」(23 節 a 新改訳 IV)。もちろん、私たちの主は、最初のイースターの朝、すでに復活されました。

b. 「次にその来臨のときにキリストに属している人たち」(23 節 b 新改訳IV)。この「来臨」という言葉は、またパルーシア(上記 1 参照)ですから、この第二段階は、確かに再臨の時に天と地にいるすべての信者で構成されます。これらは、栄光の王と一緒に帰ってくる信者の「雲」です(上記のポイント 1、および王と一緒に帰ってくることを述べている黙示録 19 章 14 節を参照)。

c. 「それから終わりが来ます。そのとき、キリストは...王国を父である神に渡されます。」(24 節 新改訳IV)。キリストの千年王国の完結にあたって、人類の歴史は終わり、私たちが知っている天と地は、「新しいエルサレム、新しい天と新しい地」(詩篇 102 篇 25-27 節; イザヤ 34 章 4 節; 51 章 6 節; 65 章 17 節 ㊦; 66 章 22 節; マタイ 24 章 35 節; ヘブル 1 章 10-12 節; 12 章 22-27 節; ペテロ第二 3 章 10-13 節; 黙示録 20 章 11 節; 21 章 1-4 節) に取って代わられるのです。この時点で、「天の王国」(キリストの千年王国支配)は「神の王国」(新しいエルサレムから父と子が統治する永遠の状態:特に 黙示録 21 章 22 節; 22 章 2-3 節 参照)となり、千年王国における信じる者たち(千年王国末にまだ生きているが、まだ死に至る肉体を持っている)の復活の最終段階が行われるのです。なぜなら、「肉と血とは神の国を継ぐことができない」(コリント第一 15 章 50 節)ので、「震われないものが残るため」(ヘブル 12 章 27 節)です。パウロが第一コリント 15 章 25-26 節で、キリストはすべての敵がその足の下に置かれるまで支配しなければならないと述べているのは、このことを意味しているのです。復活の最終段階が完了し、永遠の状態が始まると、もはや死は人類の誰にとっても問題ではなく、可能性もなくなります。その時点で、すべての者は復活させられ、信じる者たちは永遠の命が、そして信じない者たちは永遠の刑罰が与えられるのです(ダニエル 12 章 2 節; マタイ 25 章 46 節; ヨハネ 5 章 28-29 節; 黙示録 20 章 11-14 節)。

上記の議論から分かるように、パウロが説明した三つの復活の段階は、他の関連する聖句と完全に一致します。艱難期前携挙が必要とするような、もう一つの復活の段階という考えは聖書のどこにも出てきません。

4. 他の再臨の聖句: 千年王国前の艱難期前携挙は、主の再臨に関する他の聖句からも推測することが困難です。他の再臨の聖句に共通しているのは、私たちの希望の焦点として、キリストの最後の再臨(すなわち、再臨)を待ち望んでいるもので、この出来事の七年前に携挙が起こることを望んでいるものではありません。

a. テサロニケ第二 1 章 3-12 節: これはパウロによる最も長い再臨についての記述ですが、テサロニケの信者は第一テサロニケ 4 章が艱難期前携挙を教えていると思い込んでいたら、パウロの差し迫った出来事の記述に苦慮していることでしょう。テ

サロニケ第二 1 章 3-12 節に描かれているのは、長い間苦しんでいる信者が「イエス・キリストの現れ」(テサロニケ第二 1 章 7 節; 明らかに再臨のこと; 黙示録 1 章 1-3 節参照)に際して休息にあずかるというものだからです。「その日に、イエスは下ってこられ、聖徒たちの中であがめられ、すべて信じる者たちの間で驚嘆され」(10 節)、彼らを悩ます者たちは帰還する王の手の裁きを受けるというものです。もしパウロが本当に、第一テサロニケ 4 章 15-18 節で、テサロニケの人々に、この時点<再臨>の七年前に携挙されて、天国で艱難を免れて安全なのだと教えていたなら、この箇所から、キリストの栄光の再臨の日に、ついに迫害からの救済がなされるのだと知らされた人々は、ショックと混乱に陥ったことだろうでしょう(7 節)。

b. 第一テサロニケ 5 章 1-11 節: パウロが艱難期前携挙を唱えていたのなら、<4 章の>議論のすぐ後の章では、テサロニケの信者は将来の出来事の正確な時間について心配しないように言う必要もなかったことでしょう(1 節)。不信仰者にとっては、「逃れることのできない」迅速な破滅を意味します(3 節)。信者は、「信仰と愛の胸当て」と「救い<英文直訳⇒「解放」>の希望のかぶと」(8 節)を身につけて、「目をさまして慎んでいる」(6 節)ようにしなければならないのです。そして、私たちが任命されたのは、「救い<英文直訳⇒「この解放」>を得る」(9 節)ためなのです。第二テサロニケ 1 章 3-12 節と同様に、これは明らかに主の再臨の際における不信仰者の裁きと、信者の解放を対比している文脈です。文章の内容の意味は、明らかで、テサロニケの人々が、もし長生きしているなら、艱難期時代の暗い日々を「主の日」まで信仰と警戒のうちに過ごさなければならず、艱難期前携挙によって早く解放されることはないということです。

c. おとめのたとえ(マタイ 25 章 1-13 節)とタラントのたとえ(マタイ 25 章 14-30 節)は、どちらも主の再臨(直前のマタイ 24 章)の文脈で登場しますが、再臨という意味でキリストの帰還が近いことを語っていて、艱難期前の携挙とは関係ありません。私たちは、忠実な執事のように、神から与えられた資源を熱心に使うべきです。なぜなら、主の帰還が間近であり、何の警告もなく来る可能性があるからです。主は戻られた後、忠実な者には報酬を与え、不忠実な者には罰をお与えになります(再臨の時と同じです; 黙示録 11 章 18 節参照のこと; 詳しくは #18 をご覧ください)。そして、賢いおとめたちのように、私たちは主が最後に戻って来られる時まで、信仰の灯を明るくとし続けなければなりません。主が戻られたとき、信仰の途絶えた者は花婿と一緒に王国に入れず(黙示録 19 章 5-10 節参照)、排除されることになるのです。どちらのたとえ話も、艱難の試練を経てキリストが最後に戻ってくる再臨の時を、期待し、望み、見守るべき出来事として明確に設定しており、艱難と主の最後の栄光の再臨に先立つ携挙のことではありません。

d. 私たちの希望を再臨に留めている他の節:

i. テトス2章13節: 祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神、わたしたちの救主キリスト・イエスの栄光の出現を待ち望むようにと、教えている。

[注: 「出現」はギリシャ語のエピファネイアで、同義語の形容詞とともに、新約聖書ではキリストの再臨を指し、その出現の素晴らしさを強調しています。使徒 2 章 20 節; 第二テサロニケ 2 章 8 節; 第一テモテ 6 章 14 節; 第二テモテ 4 章 1 節; 4 章 8 節; 唯一の例外は第二テモテ 1 章 10 節で、これはキリストの初降臨に言及しています]。

ii. 第二ペテロ 1 章 19-20 節:

こうして、預言の言葉は、わたしたちにいつそう確実なものになった。あなたがたも、夜が明け、明星がのぼって、あなたがたの心の中を照す(すなわち、キリストが栄光のうちに再臨する)まで、この預言の言葉を暗やみに輝くともしび(詩篇119篇105節参照)として、それ(預言的靈感を受けたことば)に目をとめているがよい。聖書の預言はすべて、自分勝手に解釈すべきでないことを、まず第一に知るべきである。

iii. 第一コリント 1 章 7 節:

こうして、あなたがたは恵みの賜物にいささかも欠けることがなく、わたしたちの主イエス・キリストの現れるのを待ち望んでいる。

[注: 現れはギリシャ語のアポカルプシス(*apokalypsis*)で、同義語の動詞とともに、新約聖書でしばしば、キリストの再臨を意味し、キリストの栄光があらわされることを強調しています。ルカ 17 章 30 節; ローマ 2 章 5 節; 8 章 18 節, 8 章 19 節; 第二テサロニケ 1 章 7 節; 第一ペテロ 1 章 5 節, 1 章 7 節, 1 章 13 節, 4 章 13 節, 5 章 1 節; 黙示録 1 章 1 節]。

iv. ルカ21章25-28節: これらの事(25-27節のしるしと不思議な事)が起りはじめたら、身を起し頭をもたげなさい。あなたがたの救<「贖い(新改訳)」「解放(新共同)」>が近づいているのだから」。

[注: 贖い<口語では「救い」>はギリシャ語のアポルトロシス(*apolutrosis*)で、その同義語とともに束縛からの解放を意味します。新約聖書では、これらの言葉は通常、キリストの救いの御業によって私たちが罪から解放されることを意味しますが、時には復活によって私たちの死すべき体が究極的に解放されることを意味します(ローマ 8 章 23

節;エペソ 1 章 14 節)。重要な点は、解放とは常に何かからの解放であるということです。ここでは、困難からの解放、特に艱難の恐怖からの解放を指しています(参照:エペソ 4:30-艱難の終わりには復活による解放、ヘブル 11 章 35 節-永遠の解放が一時的な安堵より好ましい)】。

v. ピリピ 1 章 6 節:

そして、あなたがたのうちに良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している。

[注:「キリストの日」は「主[キリスト]の日」と同義語であり、いずれも再臨を意味するものである。上記の 4.b.と第一コリント 1 章 8 節, 5 章 5 節; 第二コリント 1 章 14 節; ピリピ 1 章 10 節, 2 章 16 節を参照]。

上記の証拠に加えて、新約聖書のすべての預言の中に流れている切迫感の基調は無視しがたいものであると言えるでしょう。主がご自分の再臨について語られている例を二つ挙げると、マタイ16章27節では、「人の子は父の栄光のうちに、御使たちを従えて来るが、その時には、実際のおこないに応じて、それぞれに報いるであろう」、また黙示録2章25節では、「わたしが来る時まで、自分の持っているものを堅く保っていなさい」と告げておられます。特に上記の議論に照らしてみると、これら(福音書と新約聖書最後の書の両方)のキリストの言葉は、キリストの弟子である私たちに実際に適用されていると考えるのが最善であり、キリストが現われる日は明らかに再臨の日であると思われるのです。

これは、ある意味では重要なことです。霊的なプレッシャーがあまりないときでも、このような将来の出来事に対する警戒心は、より天的で、より地上的でない視点を養うのに役立つのです。私たちはこの世にいても、この世の者ではないのですから(ヨハネ 17 章 11-16 節)。艱難期回避の保障を信じることは、聖書の終末論¹のすべての問題に関して誤った分割化を施してしまい、聖書の豊かで貴重な事柄を私たちの心から締め出し、私たちの思いを地上のものの追求に引き戻させてしまいます(第一コリント 7 章 29-31 節)。むしろ、私たちはその将来の日を熱心に待ち望み、この世のはかなく移り行くものよりも天国の報酬を得るために努力すべきなのです。

¹終末論という言葉は、ギリシャ語の eschaton、すなわち「最後のもの」に由来する。したがって、聖書の終末論研究は、正しくは、聖書に預言され啓示された未来の出来事についての研究である。

あなたがたは自分のために、虫が食い、さびがつき、また、盗人らが押し入って盗み出すような地上に、宝をたくわえてはならない。むしろ自分のため、虫も食わず、さびもつかず、また、盗人らが押し入って[それらを]盗み出すこともない天に、宝をたくわえなさい。あなたの宝のある所には、心もあるからである。(マタイ 6章19-21節)

艱難期回避の保障の教えは、信者の焦点を終末論から完全に遠ざけることをするので、その焦点は自然に天国のことではなく、この世の出来事の満ち引きに置かれるようになります(コロサイ 3 章 1-4 節を参照)。聖書の預言的聖句が本当に自分に関係があると思わなければ思わないほど、私たちは天国の市民権を意識することがなくなり(ピリピ 3 章 20 節)、代わりにこの世の事柄に集中する傾向があります(ヨハネ 2 章 15-17 節)。このような視点は、私たちのクリスチャンとしての生き方に悪い影響を与えずにはられません。

艱難期回避の保障の偽りの教義を信じることによって引き起こされる世俗的な焦点のもう一つの特に有害な側面は、信者が個人の艱難に対して満足するようになる傾向があることです(#25-26 を参照)。このような自己満足に陥っていると、特に厳しい試練の波が襲ってきたときに、脆いのです。その理由は簡単で、聖書が指摘している厳しい試練の艱難を自分は経験する必要がないと思い込むと、自分自身の試練も常に穏やかなものであると思い込む傾向があるためです。しかし、実際には、私たちは今ここで多くの個人的な試練に直面し、将来の日の信者が実際の試練に対処しなければならないのと同様な対処が求められているのです(使徒 14 章 22 節後半)。教会の初期や宗教改革の時代には、信者が定期的に殉教していたので、そのような態度を持っていることはできませんでした。しかし、現代の西洋社会では(一部の例外を除いて)、そのような極端な個人的艱難は比較的まれなように見えます。しかし、私たちが最近学んでいるように、個人的な艱難は決して稀なことではないのです。神の恵みによって、私たちは神が私たちに送るどんな試練にも耐えられることを知っています(第一コリント 10 章 13 節)。しかし、個人的なものであれ、終末的なものであれ、そのような試練が訪れたときに、私たちが何の準備もせず、その恵みを生かせないでいると危険なことになります。そのような場合、信仰は根底から揺さぶられることになってしまいます。艱難期回避の保障の誤った教えは、私たちの焦点を天のものからこの世のものに移させ、厳しい試練への備えをさせないことによって、信仰を弱め、私たちの永遠の命に害を及ぼす可能性があるのです。

艱難期回避の保障の教えは、将来、特に、避けるだろうと思っていた艱難の中に突然、紛れもなく入ってしまった信者の世代に、さらに大きな損害を与える可能性があります。

ます。もう一度言いますが、すべての偽りの教えがそうであるように、この偽りの教義も悪魔の人類に対する最初の欺きのパターンどおりです。

1) 真理の核がある: 第一テサロニケ 4 章は、確かに私たち生きている信者は、主が私たちのために戻ってこられる時に、主のもとに集められると教えています。そして、この出来事の正確な時刻は、傍目にはほとんど、あるいは全く関係ない、些細な事実であるかのように見えるかもしれません。しかし、蛇が真理を巧みに曲げたように、そのような「小さな違い」がすべてを意味することがあるのです。神は、ご自分と御子に信頼する者を守り、保護されます。しかし、時には、神の救いは、私たちを火に直面させないのではなく、火に直面するようにさせることもあるのです。これは重要な教訓であり、すべての信者が「その日が、盗人のようにあなたがたを不意に襲う」(第一テサロニケ 5 章 4 節)ことのないように、警戒し続けなければならない重要な違いなのです。

2) 強い魅力がある: 艱難期前携挙の魅力は明らかでしょう。特に、終末論に興味を持ち、調べて、艱難の恐ろしさを知っている信者にとっては、なおさらです。このような不吉な出来事から思いをそらして、主のもとに集められるという解放を思い浮かべていることはとても居心地のよいものかもしれませんが、しかしこれは、来るべき時に信者が実際に受ける試練の炉を見ないようにしているだけです。このような誤った考え方は、信者を世俗と自己満足に陥れ、自分の生きている間に起こるかもしれない将来の出来事である艱難に対する備えがないばかりか、おそらくもっと重要なのは、熱心に主を求めるすべての人が最終的に投げ込まれる試練の火炉である個人的艱難に対する備えもないままにさせてしまうことです(第一ペテロ 1 章 7 節, 4 章 12 節, 5 章 9 節)。

3) 神聖さの外観を装う:

a) 友好的な代理人: 艱難期前携挙の教義を教える多くの個人やグループのクリスチャンとしての信条は、非難を浴びるようなものではありません。これが、これまで述べてきたように、この信仰が比較的新しいものでありながら、そのような権威を持つに至った理由の一つです。艱難期前携挙の教えは、宗教改革時代にはほとんど見過ごされていた聖書の重要な領域に対する正当な関心から生まれたものです(その時代の信者は個人的な苦難に対処することで十分だったのです)。しかし、古い権威からの圧力にめげずに、聖書の真理を探究してきた思想家達やグループは、自分たち自身の教えが聖書の同じテストにかけられることから除外すべきではありません。

b) 神に対する馴れ合い: 神のもとに民が集められるという、主の再臨を待ち望むことのどこが悪いのでしょうか。私たちは皆、キリストと父なる神と永遠に共にある

というこの祝福された希望を待ち望んでいます、この出来事が全地上に訪れる大きな試練の時の後ではなく、その前に起こると信じることは、それを矮小化することになるのです。携挙は本質的に、預言的な未来について心配する必要がないことの言い訳になり、むしろ、「終わりまで持ちこたえる」(マタイ 24 章 13 節)すべての人々にとっての神による解放に望みを抱かせるものとなってしまいます。このような事前解放を信じることは、私たちの焦点を曇らせます。艱難期前携挙の間違った教えは、自分自身を訓練する代わりに、信仰に対する人生の多くの挑戦に備えさせず、私たちを安易な道に誘惑し、その結果、試練の現実に対処する準備ができていない状態にしてしまうのです。

c) 秘密の欲望を正当化すること: 実際、誰も痛みや苦しみ、厳しい試練を選ぶ人はいません。このシリーズで見てきたように) 試練を通ることは私たちにとって良いことであり、信仰を強め、清められる精錬の過程であることを聖書から理解していますが、私たちはそれを自分から進んで求めることはしません。なおさら、私たちは実際に来るべき艱難を避けたいと思ってしまうのではないのでしょうか。心の中では、財産、自由、命など、持っているものすべてを失いたくないと願っています。黙示録やダニエル書などの聖書に書かれている恐ろしい出来事の結果について考えることさえしたくないし、ましてや、その恐ろしい未来で実際に苦しまなければならないのは嫌です。しかし、真実は、天の御国とサタンのこの世の国は戦争状態にあるということです。主が私たちのために十字架で死なれて以来、多くの仲間たちが信仰のために命を絶たれ、主の聖なる御名のために殉教しなければなりません。私たち個人は、このような究極の犠牲を求められることはないかもしれませんが、そうなるように備えることが求められているのです:

それからイエスは弟子たちに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう。たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。人の子は父の栄光のうちに、御使たちを従えて来るが、その時には、実際のおこないに応じて、それぞれに報いるであろう。(マタイ 16章24-27節)

神はその偉大で比類のない恵みによって、御子を私たちに与え、私たちが生きるようにと御子を死に至らせました。それであるなら、私たちが耐え忍ぶようにと神が御心のうちに私たちに与えられたすべてにおいても、神は私たちを安全に導くために忠実

であることでしょう。もし私たちが主と共に歩むなら、どんな試練でも、どんな激しい試練の炉でも、神は私たちを優しく導いて、神と私たちの主イエス・キリストと永遠に共にある家に安全に連れて行ってくださるでしょう(ローマ 8 章 31-39 節)。

艱難期後携挙に関する注釈： 上に示したように、携挙は聖書に預言されている艱難期時代の前に起こるのではなく、その後の再臨の瞬時に起こるのです。主は、その試練の地獄から御自分を救うために戻ってこられるとき、その時代の出来事の後に私たちが「共に集められる」ことについて、非常に具体的に述べておられます。

また、彼(人の子)は大いなるラッパの音と共に御使たちをつかわして、天のはてからはてに至るまで、四方からその選民を呼び集めるであろう。(マタイ 24章31節)

「携挙」という言葉は、私たちが主とともにいるために地上から「さらわれる<引き上げられる>」という考えを伝えるためのものです(参照:マタイ 24 章 36-44 節; ルカ 17 章 34-37 節)。この考えは第一テサロニケ 4 章 15-18 節(上記参照)の引用で「さらわれる」と訳されたギリシャ語ハーパゾに由来し、私たちが再臨の時の信者の生きながら上に引き上げられることを「携挙」と呼ぶのは、この箇所のためなのです。この呼称はラテン語のヴルガータに由来し、ハーパゾー(harpazo)はラテン語の動詞ラピオー(rapio)に訳されています。ラピオの過去分詞ラプト(rapt-)に結果接尾辞チューラ(-tura)が加わり、ラテン語のラプチュラ(raptura)(英語のラプチャーrapture)が生まれ、文字通り「さらわれた状態」を意味するようになりました。新約聖書には、神によって信者が「さらわれる」事例が他に二つありますが、どちらも生きていて復活することを意味するものではありません。一つは使徒 8 章 39 節で、ピリポが聖霊によって「さらわれ」、エチオピア人の宦官と話した場所から一日の旅を経て、アゾトス(アシュドド)に運ばれた場面です。フィリポの居場所は変わったが、ピリポ自身は元の死すべき肉体にとどまっています。同様に、パウロの「天に引き上げられた人-からだのままであったか...知らない-」という記述は、一時的な恍惚状態を表していると思われますが、この人は死を免れないクリスチャンの共同体にとどまり、自分の見た幻を伝えました(第二コリント 12 章 2-4 節)。テサロニケ人への手紙第一 4 章 15-18 節だけは、実際の「携挙」、つまりキリストの再臨の時に生きている信者が復活することをハーパゾ(harpazo)(ラテン語のラプチュラ raptura)の言葉で、表現しています²。

² 黙示録 12 章 5 節の女と竜の寓話の中で、女から生まれた男子が「天にさらわれる」ことを表現するためにハーパゾー(harpazo)が使われています。この出来事の描写は、キリスト

艱難期後携挙を支持する聖句：

新約聖書には、私たちの復活の「祝福された望み」がキリストの再臨の時にしっかりとつながっている重要な箇所がいくつもあります：

1. 第一コリント15章51-52節(新共同訳)： わたしはあなたがたに神秘を告げます。わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません(つまり、ある人はキリストの再臨の時に生きながらの復活を経験する)。わたしたちは皆、今とは異なる状態に**変えられます**。(52)**最後のラッパ**が鳴る(つまり、患難の終わりと主の再臨を告げる音)とともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたち(生きている信者)は[その時(主の再臨の時)]**変えられます**。

[注:この箇所は、携挙と再臨の復活を明確に結びつけています。この次の段階である復活(上記と#20 参照)、つまり信者が「キリストの来臨の時にキリストのものとなる」時に、キリストにある死者が蘇るだけでなく、キリストにある生者も「変えられる」、つまり生きたまま変容するのです。この「変えられる」こと、つまりキリストの再臨の時に生きていて集められる者たちも、すでに主と共にいるために過ぎ去ったすべての人々と同様に復活の体を受け、永遠の姿に変化することは、パウロがその事実について特別な啓示を受けて明らかになるまでは謎で、特に明らかにされていなかったことです]。

2. コロサイ人への手紙3章1-4節： **このように、あなたがたはキリストと共に**[道理上- 買い取られた者として<英原文ではpositionally>³]**よみがえらされたのだから、上にあるものを求めなさい。そこではキリストが神の右に座しておられるのである。あなたがたは上にあるものを思うべきであって、地上のものに心を引かれてはなら**

の復活、昇天、御座につかれる時のことです。

³すなわち、彼に属するということによって、私たちは彼が持っているすべてのものを共有し、「代価を払って」復活させられたのです。つまり、主が復活されたので、私たちもその復活を分かち合うのです。それはまだ私たちに起こってはいませんが、私たちにはその確実な約束があります。ですから、パウロはそれを事実として提示しています。なぜなら、神がそれを約束した方ですから、それは事実と同じように確かなことだからです。ですから、私たちの復活の、実際の「引き落とし日」はまだ先ですが、いわばすでに「口座に計上」されているのです。位置的聖化(ペテロのレッスン#13 参照)と比べてみてください。

ない。あなたがたはすでに[道理上][そのすべてに対して]死んだものであって、あなたがたの[真の]いのちは、キリストと共に神のうちに隠されているのである。わたしたちの[真の]いのちなるキリストが[再臨の際に]**現れる**時には、あなたがたも、キリストと共に**栄光**のうちに**現れる**⁴ [つまり、復活する]であろう。

3. 第一ヨハネ3章2節:

愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ**明らか**ではない。彼が**現れる**時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである。

4. ピリピ人への手紙3章20-21節:

しかし、わたしたちの[真の]国籍は天にある。そこから、救主、主イエス・キリストのこられるのを、わたしたちは待ち望んでいる。彼は、万物をご自身に従わせうる力の働きによって、わたしたちの**卑しいからだを**、ご自身の栄光のからだと同じかたちに**変えて下さる**であろう。

5. ローマ人への手紙 8 章 18～24 節:

わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがて[再臨の時に]わたしたちに**現され**ようとする栄光に比べると、言うに足りない。被造物は、実に、切なる思いで神の子たちの出現を待ち望んでいる。なぜなら、被造物が虚無に服したのは、自分の意志によるのではなく、[アダムの子の罪の結果として]服従させたかたによるのであり、かつ、[再臨の際に]被造物自身にも、滅びのなわめから解放されて、神の子たちの栄光の自由に入る望みが残されているからである(すなわち、わたしたちの復活)。実に、被造物全体が、今に至るまで、共にうめき共に産みの苦しみを続けていることを、わたしたちは

⁴ この「現れる」という言葉はギリシャ語のファネロー(*phaneroo*)で、エピファネイア(*epiphaneia*)と同じファネー語根からきています。上述「艱難期回避の保障」の4.4を参照してみてください(ペテロ第一5章4節も参照のこと)。新約聖書では、この語群は再臨の時にキリストが世に明らかにされることを意味するために頻繁に使われます。「栄光」は神の輝かしい、比類のない輝きと評判を意味すると同時に、私たちの復活とその後の永遠の命の輝きを意味する言葉としてよく使われます: ローマ2章7節, 8章17節; 8章18節; 第一コリント15章43節; 第二コリント3章18節; 4章17節; コロサイ1章27節; 第一テサロニケ2章12節; ヘブル2章10節; 第一ペテロ5章1節; 5章10節。

知っている。それだけではなく、御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の中でうめきながら、子たる身分を授けられること、すなわち、**からだのあがなわれること**(すなわち復活)を待ち望んでいる。わたしたちは、この望みによって救われているのである。

未来の脅威： 以上で、私たちの信仰を脅かしている三つの誤った教義の危険性を要約する準備が整いました。「終わりの日」(第二テモテ 3 章 1 節; 第二ペテロ 3 章 3 節) は、主の再臨(すなわち、再臨によって終わる患難)で最高潮に達する最後の預言された期間で、私たちの信仰に比類のない、強烈な挑戦をもたらすでしょう。それは教会の初期から差し迫っていた時代ですが、私たちはそれが決して私たちに及ぶことはないと思い込んだり、「約束された主の再臨はどこにあるのか」と皮肉るペテロ第二 3 章 4 節にあるあざける者のようになってはいけません。ペテロは、人々が依存している世界は、やがて新天新地が出現する際に消滅することを率直に説明しています(5～13 節)。私たちは艱難の試練を受けなければならない世代ではないかもしれませんが、そうであろうとなかろうと、受けることはないとは仮定することは賢明ではなく、すでに見たように、そう思い込むことは結局は信仰にとって不健全なことなのです。私たちが学んできた三つの誤った教義、「組織団体所属による保障」、「既得地位的保障」、「艱難期回避の保障」のどれかに依存することは、私たちの最も貴重な信仰に脅威を与えるもので、危険なことです。その危険性は、今ここにあるものですが、これらの誤った教えを信じることは、そのような信念を艱難に持ち込む人々にとって、さらに大きな負債となります。

団体及び組織所属による保障:

現在における危険性： 特定の教会や個人に救いを求めることは、キリストへの信仰による真の救いから「離れていく」危険性があります(ヘブル 2 章 1-4 節)。

将来における危険性： このような考え方をする人は、艱難時代の世界規模の大きな偽宗教に引き込まれやすく、神の小羊ではなく獣を拝んでしまうかもしれません(マタイ 24 章 24 節、第二テサロニケ 2 章 1-12 節、黙示録 13 章 1-18 節)⁵。

解決策： 個人や組織への忠誠心ではなく、救いのためにキリストへの真の信

⁵ この宗教の偽教師の方法論については、第一テモテ 4 章 1-5 節; 第二テモテ 2 章 16 節-3 章 9 節; 第二ペテロ 2 章 1-3 章 13 節; ユダの手紙 3-19 節も参照してください。

仰を通してキリストのからだの一員であることに頼るなら、その信仰は指導者や組織がどんな誤った手段をとっても、朽ちることなく保たれます。

既得地位的保障:

現在における危険性: 自分達の行動とは全く関係なく救いが保障されていると信じることは、罪に抵抗する決意を弱め、心を硬くし、背教と永遠の命の喪失につながります(ガラテヤ 6 章 7-8 節; ヤコブ 1 章 14-16 節)。

将来における危険性: 艱難時代の大背教が始まり、その時代の激しい圧力によって多くの人が信仰から離れると、この危険性は、幾何級数的に大きくなる(マタイ 24 章 9-13 節; 第二テサロニケ 2 章 3 節-)。

解決策: もし私たちが霊的成長を遂げているなら、信仰は急速に成長し、この畏にはまる恐れはありません(第一テモテ 4 章 16 節; ヤコブ 1 章 21 節; 以下も参照してください)。

艱難期回避の保障:

現在における危険性: 私たちの信仰にとって究極の脅威である艱難に直面する必要がないという確信が、今ここにいる私たちの警戒心に悪い影響を与えます。それは私たちを人生の個人的な苦難に対する備えをなくさせ、私たちの焦点をキリストの再臨からそらさせ、代わりに「この地上のもの」に目を向けさせ、将来の報酬に目を向けながら主のために生産的になる動機の多くを奪ってしまいます(コロサイ 3 章 1-4 節; ペリピ 3 章 19 節)。

将来における危険性: もし私たちがサタンの世界支配の最後の恐ろしい時期に直面することになるなら、私たちの信仰の生存のために警戒が不可欠になります。私たちはそのような脅威に直面することはないと信じることほど、艱難の特殊な脅威(サタンの世界的な宗教を含む)に直面したときに、私たちを盲目にさせるものはないでしょう。そのような<艱難期は通過しないというような>考え方は、その信奉者を危機に対する備えも、その危険に対する警戒心もなくさせてしまいます(ルカ 12 章 37 節、40 節; 18 章 8 節)。

解決策: 主の再臨が間近に迫っていることを待ち望むことは、私たちの希望を主、すなわち私たちの永遠の命、永遠の報酬、そして復活に正面から向き合う助けと

なります。日ごとに祈る主の祈りにあるように、キリストの御国が来ることを真の近い現実として見ることは、錨のように、私たちの希望を天に置き、私たちの思考と願望を永遠に向けさせて、この世の偽りから守ってくれます(ヘブル 6 章 18-20 節)。

「命に至る門は狭く、その道は狭い」(マタイ 7 章 14 節) とあります。私たちクリスチャンは、私たちが信じなければならないのは誰であるか知っています--主であり救い主であるイエス・キリストです--一人との個人的つながりや組織的な所属(団体所属による保障)は主イエスへの信仰に取って代わることができないことを知っています。私たちは、この人生で何をしなければならないかを知っています。それは、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストに従うことです--かつての信仰が枯れてしまって、今は主を否定している人々を主が支持されるわけはありません(既得地位的保障)。そして最後に、私たちはどのようにイエスに従わなければならないかを知っています--それは自分の十字架を負うことであり、試練から簡単に解放されるという希望的予測(艱難期回避の保障)は、信仰が耐えられるかどうかを試す、預言的なものと個人的なものの両方の試練から私たちを免除させてはくれません。

私たちクリスチャンの人生においては、真理が問題なのです。私たちの主は「道であり、真理であり、命」(ヨハネ 14 章 6 節)であられるので、主と父を礼拝しようとする者はみな「霊とまこと」(ヨハネ 4 章 24 節)をもってしなければなりません。私たちの真理の源は神の言葉であり(ヨハネ 17 章 17 節前半)、神の言葉の中にある真理によって私たちは自らを聖別し、悪魔の腐敗した世界から自分を聖別するのです(ヨハネ 17 章 17 節後半)。偽りの教えや偽りの教義はこの真理を腐敗させ、私たちの信仰の神髄を攻撃するので(マタイ 7 章 15 節、ヨハネ 10 章 1-18 節、使徒 20 章 29 節)、主が示されたように聖書を尊重し(マタイ 5 章 17-20 節、ヨハネ 10 章 34-35 節、ヨハネ 17 章 12 節)、毎日聖書を読み、学び、そこから学習できる素晴らしい機会を最大限に活用する必要があります。そうすることによって、また、霊的な成長を遂げることによって、このレッスンで取り上げた間違った教えからだけでなく、将来私たちの耳に入るかもしれないあらゆる偽りの教えから身を守ることができるのです。

まとめ:

1. 団体組織所属による保障はありません: 私たちが救いを得るためには、キリストに信仰を置かなければならず、組織への所属やカリスマ的な人物への忠誠を信賴してはいけません。そうでなければ、道端に落ちた種のように、私たちの信仰が真の根を持たないようなものになってしまいます(マタイ 13 章 4 節, 19 節; マルコ 4 章

4 節, 15 節; ルカ 8 章 5 節, 12 節)。

この人による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである。(使徒行伝 4章12節)

わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。(ヨハネ 14章6節)

2. 既得地位的な保障はありません：私たちの救いを維持するために、私たちは信仰を持ってキリストに従い続けなければなりません。一度信じたのだから、私たちの行動はもはや問題ではないと考えてはいけません(私たちの行動は、良くも悪くも私たちの信仰に影響を与えるのです)。石地に落ちた種のように、誘惑と試練の中で信仰を捨てないように(マタイ 13 章 5-6 節, 20-21 節; マルコ 4 章 5-6 節, 16-17 節; ルカ 8 章 6 節, 13 節)。

神の慈愛と峻厳とを見よ。神の峻厳は倒れた者たちに向けられ、神の慈愛は、もしあなたがその慈愛にとどまっているなら、あなたに向けられる。そうでないと、あなたも切り取られるであろう。しかし彼らも、不信仰を続けなければ、つがれるであろう。(ローマ 11章22-23節前半)

3. 艱難期回避の保障はありません：私たちの救いを確かなものにするためには、キリストにあつて霊的に成長し続け、霊的な賜物を通して他の人が同じように成長するのを助け、地上の目標を永遠の報酬の希望と置き換えないようにしなければなりません。いばらの中に落ちた種のように、私たちの信仰が永遠の焦点を失い、人生の誘惑や苦難によって塞がれ、私たちの生産と成長が妨げられないように(マタイ 13 章 7 節, 22 節; マルコ 4 章 7 節,18-19 節; ルカ 8 章 7 節,14 節)。

これらのもの[5-7節に述べられている徳]があなたがたに備わって、いよいよ豊かになるならば、わたしたちの主イエス・キリストを知る知識について、あなたがたは、怠る者、実を結ばない者となることはないであろう。これらのもの[5-7節に述べられている徳]を備えていない者は、盲人であり、近視の者であり、自分の以前の罪がきよめられたことを忘れている者である。兄弟たちよ。それだから、ますます励んで、**あなたがたの受けた召しと選びとを、確かなものにしなさい**。そうすれば(クリスチャンとしての徳を高め、成長し、仕えることに専心するなら)、決してあやま

ちに陥ることはない。こうして、わたしたちの主また救主イエス・キリストの永遠の国に入る恵みが、あなたがたに豊かに与えられるからである。(第二ペテロ 1章8-11節)

バックスライディングの危険性: 個々の信者の信仰に脅威を与えるのは、上記三つの誤った教義だけではありません。実際、信者に偽りの安心感を与えながら、最終的には混乱し、裏切られ、見捨てられたと感じさせる教えはすべて、霊的成長を停滞させ、前向きな成長を逆転させることさえします。このような霊的方向性の逆転を表す言葉としてよく使われるのが「バックスライド」で、このような霊的退廃のプロセスは驚くほど単純で、キリストに対する信仰と呼ばれる心からの忠誠を徐々に損なわせるものです:

1) **怠慢な態度:** 主は私たちに、正しく行動し、憐れみを愛し、主の前に謙虚に歩むこと以外に何を求めておられるでしょうか(ミカ書 6 章 8 節)。主に耳を傾け、主から学び、心を尽くして主を求めることなしに、主と共に歩むことはできませんし、主のことばに心を傾けることなしには不可能です(ヨハネ 4 章 24 節)。霊的成長を怠れば、人生のすべてに悪影響を及ぼします。なぜなら、私たちが変わり、聖化されるのは、ただ御言葉の真理によるのです(ヨハネ 17 章 17-19 節)。極端に言えば、御言葉の真理に無関心であれば、私たちの心に空洞ができ、必然的に嘘で埋め尽くされることになります(エペソ 4 章 17-19 節)。

2) **嘘に対する寛容さ:** この学びの中で、園での悪魔の巧妙な最初の欺きについて最初に見てきたように、すべての嘘は真理に対する攻撃から始まります。主に従わないクリスチャンは、立ち止まったままではいられません。クリスチャン生活では、長い間「二つの意見の間で立ち止まる」ことは不可能であり(列王記上 18 章 21 節)、神の道への興味を失うと、すぐに他の道への好奇心に取って代わられるでしょう。神の真理の探求を放棄することは、その真理を心の空洞に流れ込む嘘八百と交換する最初の段階です(ローマ 1 章 25 節)。真理に無関心になることは、私たちを嘘に対して脆弱にするのです。

3) **罪に対する寛容さ:** 罪は常に危険です。少なくとも、私たちがこの死を免れない肉体をもっている限りは。私たちが神の御言葉を基準として真理から離れ、代わりに偽りの情報に基づいて行動し始めると、ヤコブ書に書かれているような罪深い墮落のパターンに陥りやすくなります(ヤコブ 1 章 14-15 節)。神の御言葉の外では、地上のあらゆる欲望が容認され、正当化されることさえあるので、欲望から罪へ、そして無制限の罪へのプロセスが加速されます(1 ペテロ 2 章 11 節; ヤコブ 4 章 1 節後半)。

4) 心のかたくなさ:⁶ 罪が明白であろうと隠されていようと、社会的に受け入れがたいものであろうと、ありふれたものであろうと、人生における罪の増加は、私たちの神からの疎外感を強めます。私たちが罪に満足するようになると、神が何を望んでおられるかに対する感受性を失い始め、神が私たちの思考の中に入ってくることはほとんどありません(ヨハネ 12 章 40 節, 第二コリント 3 章 14 節)。その時点で、自分の悪しき行いに、神が光を当ててくださることを願わないので、もはや神のもとに来ることに興味を持ちません(ヨハネ 3 章 19-21 節、エペソ 4 章 17-24 節、5 章 8-14 節)。罪の道は私たちを主から遠ざけるのです(イザヤ 59 章 2 節)。背教によって神との間に厚い壁が築かれてしまった段階になると、それを突き破ってもらうために、しばしば主からの厳しい懲罰を必要とします(第一コリント 5 章 5 節; 黙示録 3 章 19-20 節)。

5) 霊的な死: 最後に、ヤコブが言っているように、この抑制されない罪は死、つまり霊的な死を生み出します(ヤコブ 1 章 15 節)。霊的な死は、私たちが生まれた時の状態であり、後戻りの過程の最終的な結果なのです。悔い改めることなく、回復することなく、罪の道を歩み続けることは、私たちの主人であるイエス・キリストに対して、常に意図的に選択をし続けることを意味し、次第に私たちの思考から遠ざかり、私たちの信仰が完全に息絶えるとき、心から完全に消えてしまいます(マタイ 7 章 21-23 節)。だから、罪の報酬はいつでも死なのです(ローマ 6 章 23 節)。その時、神から完全に離れ、キリストを信じた者はキリストの十字架の敵となり(ピリピ 3 章 18 節)、罪の捕虜となって再び奴隷になってしまいます(ヨハネ 8 章 34-35 節)。そして、その結末は初めよりも悪いものとなります(第二ペテロ 2 章 20-23 節)。なぜなら、結局この道はキリストを拒絶することにつながるからです(第一ヨハネ 5 章 16-17 節; cf. マタイ 12 章 31 節とヘブル 6 章 4-6 節も参照のこと)。

というわけで、聖書には、私たちが警戒し、自分の生き方を注意深く評価するように警告している箇所がたくさんあるのは不思議なことではありません。なぜなら、私たちの信仰と永遠の命にかかわる問題だからです。

1. 救いは信仰の継続を条件とすることを示す聖句:

あなたがたも、かつては悪い行いをして神から離れ、心の中で神に敵対していた。しかし今では、御子はその肉のからだにより、その死をとおして、あなたがたを神と和解させ、あなたがたを聖なる、傷のない、責められるところのない

⁶ シリーズ「出エジプト記 14 章：パロの心を硬くする」を参照のこと。

者として、みまえに立たせて下さったのである。**ただし、あなたがたは、ゆるぐことがなく、しっかりと信仰にふみとどまり、すでに聞いている福音の望みから移り行くことのないようにすべきである。**この福音は、天の下にあるすべての造られたものに対して宣べ伝えられたものであって、それにこのパウロが奉仕しているのである。(コロサイ 1章21-23節)

＜欽定訳では、「もし… であるなら…」。新改訳では、「すべき」が「なければならない」となっています＞

次の言葉は確実である。「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう。もし耐え忍ぶなら、彼と共に支配者となるであろう。**もし彼を否むなら、彼もわたしたちを否むであろう。**たとい、わたしたちは不真実であっても、彼は常に真実である。彼は自分を偽ることが、できないのである」。(第二テモテ2章11-13節)

もしあなたがたが、いたずらに信じないで、**わたしの宣べ伝えたとおりの言葉を固く守っておれば、**この福音によって救われるのである。(第一コリント 15章2節)

キリストは御子として、神の家を治めるのに忠実であられたのである。**もしわたしたちが、望みの確信と誇とを最後までしっかりと持ち続けるなら、**わたしたちは神の家なのである。(ヘブル 3章6節)

もし最初の確信を、最後までしっかりと**持ち続けるならば、**わたしたちはキリストにあずかる者となるのである。(ヘブル 3章14節)

2. 信仰を守るように警告している聖句:

あなたがたは、はたして[クリスチャンとして]信仰があるかどうか、自分を反省し、自分を吟味するがよい。それとも、イエス・キリストがあなたがたのうちにおられることを、悟らないのか(ヨハネ14章23節参照)。もし悟らなければ、あなたがたは、にせものとして見捨てられる。(第二コリント 13章5節)

これらの出来事は、わたしたちに対する警告であって、彼らが悪をむさぼったように、わたしたちも悪をむさぼることのないためなのである。だから、彼らの中のある者たちのように、偶像礼拝者になってはならない。すなわち、「民

は座して飲み食いをし、また立って踊り戯れた」と書いてある。また、ある者たちがしたように、わたしたちは不品行をしてはならない。不品行をしたため倒された者が、一日に二万三千人もあった。また、ある者たちがしたように、わたしたちは主を試みてはならない。主を試みた者は、へびに殺された。また、ある者たちがつぶやいたように、つぶやいてはならない。つぶやいた者は、「死の使」に滅ぼされた。これらの事が彼らに起ったのは、他に対する警告としてであって、それが書かれたのは、世の終りに臨んでいるわたしたちに対する訓戒のためである。**だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい。**(第一コリント 10章6-12節)

よく注意して、わたしたちの働いて得た成果を失うことがなく、豊かな報いを受けられるようにしなさい。すべてキリストの教をとおり過して、それにとどまらない者は、神を持っていないのである。その教にとどまっている者は、父を持ち、また御子をも持つ。(第二ヨハネ 8-9節)

わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。人がわたしにつながっていないならば、枝のように外に投げすてられて枯れる。人々はそれをかき集め、火に投げ入れて、焼いてしまうのである。(ヨハネ 15章5-6節)

3. 罪深い行いは、信仰と相反するものであると教えている箇所:

肉の働きは明白である。すなわち、不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、まじない、敵意、争い、そねみ、怒り、党派心、分裂、分派、ねたみ、泥酔、宴樂、および、そのたぐいである。わたしは以前も言ったように、今も前もって言うておく。このようなことを行う者は、神の国をつぐことがない。(ガラテヤ5章19-21節)

それとも、正しくない者が神の国をつぐことはないのを、知らないのか。まちがってはいけない。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者は、いずれも神の国をつぐことはないのである。(第一コリント 6章9-10節)

また、不品行といろいろな汚れや貪欲などを、聖徒にふさわしく、あなたがたの間では、口にすることさえしてはならない。また、卑しい言葉と愚かな話やみだらな冗談を避けなさい。これらは、[あなたがたの間では]よろしくない事である。それよりは、むしろ感謝をささげなさい。あなたがたは、よく知っておかねばならない。すべて不品行な者、汚れたことをする者、貪欲な者、すなわち、偶像を礼拝する者は、キリストと神との国をつぐことができない。あなたがたは、だれにも不誠実な言葉でだまされてはいけない。これらのことから、神の怒りは不従順の子らに下るのである。だから、彼らの仲間になってはいけない。(エペソ5章3-7節)

富むことを願い求める者は、誘惑と、わなとに陥り、また、人[の心]を滅びと破壊とに沈ませる、無分別な恐ろしいさまざまな情欲に陥るのである。(第一テモテ6章9節)

自分の永遠の命を守る： イエス・キリストを信じる者として、私たちは永遠の命を持っています。そして、それは私たちの最も貴重な財産です。畑に隠された宝を見つけた人が、自分の持っているものすべてを売り払ってその畑を買ったように(マタイ 13 章 44 節)、永遠の命はこの世のものとは比べものにならないほどの喜びです。私たちの永遠の命もまた、隠された宝物のように、まだ発掘されてはいないのです。それはキリストの中に隠されていて、復活の時に明らかにされるように準備されているのです(コロサイ 3 章 1-4 節)。しかし、私たちは今ここでその命、永遠の命を持っているのであり、その最も貴重な財産を守ること以上に重要なことはありません。信仰が生きたものである限り、私たちの永遠のいのちは続きます。私たちの信仰こそ、私たちの永遠の命の鼓動だからです。信仰を守り、強めることによって、私たちは永遠の命を安全に保つことができるのです(第二ペテロ 1 章 10 節)。どんな組織もこの命を提供することはできません。一度だけの信仰告白でこの命が保証されることはありません。また、現在や来るべき未来の人生の重圧を否定しても、私たちが直面しなければならない心配や試練からこの命を守ることはできないのです。安心は、この世のエジプトに戻るのではなく、永遠の約束の地に向かって邁進することにあるのです。御言葉を通して神を求め(第一ペテロ 2 章 2 節)、与えられた賜物を通して神に仕える(第一テモテ 3 章 13 節、4 章 15-16 節)私たちは、道の終わりに永遠の不思議、勝利の祝福と報酬、新しい天、新しい地、新しいエルサレム、復活、私たちの主イエスキリストと永遠に交わる永遠のいのちがあることを知って、どんな犠牲を払ってでも永遠の道を歩み続けるのです。

もし私たちがこの岩、私たちの救い主イエス・キリストの上に人生を築くなら、私たちの土台は何があっても安全であるでしょう。彼は私たちの唯一の真の安全保障であり、私たちがどのような苦難に耐えるよう求められても、堅固でしっかりしたものだからです。もし私たちが主を信頼し続け、毎日自分の十字架を背負って主に従い続けるなら、私たちは決して何も恐れることはなく、信仰はからし種のように成長し、最初はただの苗木だったものが、目の前で大きく立派な木に成長し、どんなに厳しい人生の荒波にも揺るがない木になったことが分かるようになるのです。